

はなの輪



広島市植物公園植物友の会

2026年10月－12月 通巻第189号



開園当時の風景



大きく成長した越の彼岸桜(2026年)

表紙の写真解説 『コスモス・サクラ・50年前の風景』

— 開園50周年を迎えて —

本年11月3日、当園は開園50周年という大きな節目を迎えます。半世紀にわたる歩みは、植物を育て、研究し、その魅力を伝えてきた人々の営みと、四季折々の風景を楽しみに訪れてくださった多くの皆様の思い出によって支えられてきました。50周年の記念号となる本号の表紙には、開園当時の風景とともに、秋を代表する花、コスモスを選びました。

コスモス (*Cosmos bipinnatus*) は、キク科コスモス属の一年草です。細く切れ込みの入った葉と可憐な花を秋風に揺らす姿から「秋桜」の名でも親しまれています。

集団となって咲くその姿は、日本の秋を象徴する風景の一つとなっています。当園のコスモスは、花そのものの美しさだけでなく、一本一本に支柱を添えるなど、栽培担当者が細やかな手入れを重ねることで、その美しい姿が保たれています。花の向こうにある、こうした日々の仕事にも目を向けていただければと思います。

コスモスには、育種の歴史という別の魅力もあります。現在では広く親しまれている黄色いコスモスは、玉川大学農学部研究者による長年の育種研究から生まれたものです。1957年に黄色く発色した個体が見いだされたことを端緒として、選抜と交配が重ねられ、1987年には「イエローガーデン」として品種登録されました。その後も育種研究は続き、「イエローキャンパス」など新たな品種へと受け継がれています。なお、当園ではコスモスとは別種のキバナコスモス (*Cosmos sulphureus*) の育種に取

り組み、園内装飾への活用を目指しています。

さらに、コスモスの開花期に行う「花みくじ」など、植物を介した来園者との交流も、当園が長年にわたり育んできた大切な文化の一つです。

50年前、開園当時はまだ幼かった私も、その後、当園で植物の普及啓発や広報に携わる機会を得て、植物と人をつなぐ仕事に長く関わってまいりました。一度、当園を離れて外の世界を経験した後、令和3年に再びこの場所に戻った際、かつての若木が立派な大木となり、見事な花を咲かせる桜の姿に、「ここは桃源郷か」と思うほどの感慨を覚えました。植物の成長を目の当たりにすることで、50年という歳月の重みをあらためて実感した瞬間でした。

当園を特色づけるラン科植物をはじめ、コスモスを含むキク科、桜を含むバラ科など、多様な植物がそれぞれの姿で季節を彩っています。そこには、植物そのものの魅力に加え、長年にわたり研究や育種、栽培、展示、普及に携わってきた人々の知恵と情熱が息づいています。

開園当時の風景、年月を重ねて立派に育ち大木となった桜、そして秋風に揺れるコスモス。そこには、植物の成長と人の営み、そして半世紀という時間が重なっています。50周年を一つの到達点とするのではなく、これまでの歩みを次の世代へつなぐ新たな出発点として、これからも植物の魅力と価値を伝え、人と植物、人と人をつなぐ場として歩みを進めたいと思います。

[文・写真：富澤 まり]



《開園50周年記念特別企画展》 植物公園50年のあゆみ～思い出の写真展～



広島市植物公園が開園50周年を迎える今年は、『植物公園50年のあゆみ～思い出の写真展～』を10月17日～12月24日まで展示資料館で実施します。この展示では当園の歴史を振り返りながら、公募した写真を展示します。また、普段はお見せする機会が少ない開園当時の写真や昔実施したイベントの風景写真も展示します。

[文：佐藤 祐輔]



植物公園花ごよみ



10月～12月に見ごろを迎える植物

12月～2月



ガーデンプリムラ 'アラカルトシュシュ'
(カスケード)

6月～11月下旬



センニチコウ 'ファイヤーワークス'
(ログガーデン)

9月下旬～10月



ジニア 'プロフュージョン'
(ログガーデン)

10月頃



ダリア
(ログガーデン)

10月中旬～11月上旬



コスモス 'センセーション'
(森のレストラン前)

6月～11月



シクンシ
(大温室)

10月下旬～11月上旬



バラ 'ジャストジョーイ'
(バラ園)

10月下旬～11月



キクタニギク
(里山の野草園)

10月～12月上旬



アメジストセージ
(進化園)

11月



ヤクシソウ
(里山の野草園)

10月



コバノフジバカマ
(ハギ園、展望塔横)

11月～12月



グランサムツバキ
(ツバキ園)

園芸ワンポイントレッスン



《屋内植物》 ハオルチアの植え替えについて

ハオルチアは種類が豊富で育てやすい多肉植物です。植え替えの適期は春と秋で、様子を見ながら1～2年に1度くらいのペースで植え替えます。ハオルチアは軟葉系と硬葉系にざっくり分類でき、軟葉系は夏の蒸れにやや弱い傾向があるため、春秋の中でも暑い時期は避けた方が安心です。

用意するもの

- ・水はけのよい土（配合比例：赤玉土1、鹿沼土1、日向土1、市販の草花培養土1、元肥としてマグァンプを土の総量に対して適量） 粒の大きさは小粒か中粒あたりがおすすめ
- ・スリット鉢（素焼き鉢も可）
- ・底石（鉢が浅い場合は鉢底ネット）

手順

- 1 数日前から水やりをやめ、乾かしておく。
- 2 鉢から取り出す。根をほぐし、土を落とす。傷んでいる根や株元の枯れ葉を取り除く。
- 3 根がたくさんある場合は、太く元気な根以外を少し切って減らしてから植え付ける。
- 4 鉢を軽く揺らしてみてもグラグラしなければOK。

ハオルチアの根は、古くなると茶色くなり、中がスカスカになります。白い元気な根だけを残し、古い根はすべて除去しましょう。

春に植え替える場合は、根を短く切り詰めても元気に成長しますが、秋は春よりも生育が緩慢になるので、秋に植え替える場合は元気な根は切らない方が無難です。

株分けや、鉢サイズを下げたい場合等、根をしっかり切った方が良い植え替えは春をおすすめします。



硬葉系（左から初霜、特選十二の巻、聖の峰）



軟葉系（左から斑入り寿、三色万象、オブツーサ）

イベント広場にあるベゴニア温室は、1996（平成8）年11月にオープンしました。様々なベゴニアの野生種や園芸品種を展示していますが、中でもよく目立つ豪華な球根ベゴニアを通年開花させるためには夜間の電照や冷暖房が必要なため、「温室」といいながら夏から秋にかけては冷房の効果で涼しく、来園いただいた方々に非常に人気がある施設となっています。

実は、ベゴニア温室には前身となる施設があります。サボテン・展示温室と3連棟になっているフクシア温室がそれです。本文では「旧ベゴニア温室」と呼ばせていただきますが、1981（昭和56）年に完成しました。球根ベゴニアは長日植物（夜が一定時間より短い状態が続くことにより開花が促される植物）であるため、特に秋～冬の終わ



旧ベゴニア温室

りごろにかけては夜に光をあて、つぼみを作るのをやめないように人為的な処理を行う必要があります。また品種改良の親となった野生種の原産地が熱帯アメリカの標高1,000～2,000mくらいの地域なため、極端な暑さや寒さを嫌う性質があります。球根ベゴニアを温室の目玉としていたため、旧ベゴニア温室では前述のように「電照」や「冷房」の設備を備えていました。華やかな球根ベゴニアは当時から人気がありましたが、前述の性質を持っているために一般的には一年を通しての展示は困難でした。しかし、当時としては先進的な施設を備えることにより一年を通して満開の球根ベゴニアを展示し、人気を集めていました。

私が本園に来てから約5年後に今のベゴニア温室が公開されました。本園の開園20周年に合わせて、大人気の球根ベゴニアをメインとしつつ、国内でも有数のコレクションを持つ様々なベゴニアを一堂に展示する温室を作ることとして準備が始まっていました。また、旧ベゴニア温室では、これまた全国的に見ても珍しい、球根ベゴニアを種から育てる様子の展示をしていたのですが、それを大規模にして、一連の栽培の様

子（バックヤード）を展示として見せる機能を新ベゴニア温室に盛り込みました。



球根ベゴニアの育苗（旧ベゴニア温室）

さて、とりあえず「空き家」となった旧ベゴニア温室ですが、約半年後にフクシア温室として再出発しま



姉妹都市・友好都市の植物展で展示したフクシア

した。フクシアが選ばれた経緯として、1989（平成元）年10月22日から11月23日に広島市制100周年記念姉妹都市・友好都市の植物展が開催された際にハノーバーの市立植物園から寄贈された植物の中にフクシアがあり、人気が高かったことがきっかけの一つになったと聞いています。また、フクシアは多くの品種が長日植物であり、極端な暑さや寒さを嫌う性質があるので、旧ベゴニア温室の電照や冷房設備を引き続き有効に使うことができるということも大きな要因となりました。なお、フクシア温室に模様替えする際に、当時、年に3～4回開催していたラン展でしか展示をすることができなかった、当園が誇る貴重なラン科植物のコレクションを一年を通して展示できるようにするために、この温室の一角に展示スペースを設けたことを書き添えておきます。

植物観察入門 『サクラ』

皆さんは「サクラ」と聞いて、どのような形や色の花を思い浮かべますか？5枚の花びら（花弁）の先が少し凹んでいる淡いピンク色の花でしょうか？それはソメイヨシノの花弁（図2）です。では、お花見の時に、サクラの花ひとつひとつをまじまじと観察したことはあるでしょうか？サクラは野生種が9種程度、栽培品種は500種以上ありますが、その種類によって樹形や花の形・色などは十人十色で、非常に奥深い世界です。今回、その一部をご紹介します。お花見の季節にはまだ半年ほどありますので、予備知識を増やして備えましょう。



図1 サクラの各部位 (写真は嵐山)



図2 染井吉野 (江戸彼岸とオオシマザクラの交配種)



図3 普賢象 (名の由来にもなっている葉化した2本の雌しべが特徴)



図4 越の彼岸桜 (萼筒はエドヒガンの特徴である壺型を引き継いでいる)



図5 大提灯 (複数枚の旗弁が表れる)
※旗弁 (きべん) とは雄しべが花弁状に変化したもの



図6 寒緋桜 (花が平開しない)



図7 六高菊桜
(花弁数80枚以上の菊咲き)



図8 鬱金(左)と御衣黄(右)
(黄緑色の花弁が特徴的、散り際は赤みが入る)

今回触れた内容の詳細は、3月23日に開催されるうんちく語り「～百花繚乱～ サクラの魅力」にて深掘りしますので、そちらも是非チェックしてみてください。

(文・写真 堀川 大輔)

 **広島市植物公園**

広島市佐伯区倉重三丁目495

☎ 082-922-3600 FAX 082-923-6100

■開園時間 午前9時～午後4時半 (入園は4時まで) ■休園日 毎週金曜日
■入園料 大人510円、高校生および65歳以上170円、中学生以下無料
■駐車料 軽・普通自動車450円、中・大型車1,400円

